

達磨の変容

- 河村若芝の位置 -

赤木美智（大阪大学大学院文学研究科助手）

河村若芝（1638～1707）は、師である渡来明人の逸然性融とともに、長崎において黄檗宗関係の作画を手がけた画家の一人として知られている。若芝に関する本格的な研究は、戦前の古賀十二郎氏によるものを別にすると、1991年神戸市立博物館において開催された『隠元禅師と黄檗宗の絵画展』を端緒とする。そこで企画者の成澤勝嗣氏は、逸然や若芝の作品を、伊藤若冲や曾我蕭白など「18世紀に上方で流行をみた 奇想の造形美のルーツ」と位置づけられた。また、発表者は昨年「河村若芝の研究 - 文献と初期作品を中心に -」において、若芝の事暦を全般にわたって紹介するとともに主として初期における中国画学習の実態について検討し、若芝が逸然だけでなく、渡来文人の作品を契機として絵画制作を始めたことを明らかにした。

しかし若芝の個性が最もよく現れた中後期の作品については、いまだ十分な考察をしていない。そこで本発表では、最も作例の多い達磨図を中心にとりあげ、図像と表現の変化を分析し、独特の作風の成立について考察したい。

遺作中最初の「芦葉達磨図」（寛文五年〔1665〕）は、黄檗宗周辺の余戯的な墨画学習を基に制作されたと位置づけられる。若芝はこれ以降、同図像を用いた多数の作品を描くが、その表現は墨画から着色画へ変わっていく。同時に墨画の簡略な筆致は、やがて脚の毛まで丹念に描くような精密で執拗な表現になり、図像的にも様々な変化がみられる。新出作品「達磨図」（同九年〔1669〕）は、得意とする芦葉達磨の図像を元にしながらも、鉢を掲げて立つ「托鉢達磨図」とも呼べる特異な作品である。さらに、長崎県蔵本「芦葉達磨図」（同十二年〔1772〕）は、それまで以上に怪異な顔貌で、珍しく経巻を持つ姿で描かれる。そして画業の後期にあたる貞享元年（1684）最も不思議な「芦葉達磨図」を制作するにいたる。達磨は白い波濤が立つ荒波のなか芦に乗り、右手に編み笠を結わえた柱杖を握り、肩に担ぐ。その顔は真正面に向けられ、大きく両眼を見開き観る者を見据えている。本図には同様の作例がもう一点知られるが、顔を真正面に向ける姿と持物の組み合わせは、若芝画以外に類例を求めることができない。

これらの先例のない達磨図はいかにして生み出されたのだろうか。この点については若芝と接点があったと推測される黄檗僧、即非如一が仏画に言及した書簡の解釈も含めて、その背景を探ってみたい。そこには18世紀において、「奇」を評価し、画家達の個性的な作風を支えた陽明学のいち早い影響を想定することも可能かもしれないと考えている。

以上、本発表では、若芝作品における達磨の変容の意味を解き明かすことを通して、やがて18世紀において花開く豊饒な絵画世界が、すでに17世紀後半の段階で河村若芝という一地方画家のなかに、確かに胎動していたことを示したいと思う。